

## 風土論的精神構造論

塹江 清志・水野 和夫\*・塹江 光子\*\*

システムマネジメント工学科

(2000年8月28日受理)

### A Climatological Approach to the Theory of Mental Structure

Kiyoshi HORIE, Kazuo MIZUNO\* and Mitsuko HORIE\*\*

*Department of Systems Management and Engineering*

(Received August 28, 2000)

#### SUMMARY

The purpose of this paper is to demonstrate that the psychological traits the “feeling of togetherness” as a Japanese “national psychological trait” and the “feeling of separateness” as a western European “national psychological trait” have both been formed historically by the different existential modalities of nature in Japan and in Europe.

The following issues are considered:

1. The “national psychological traits” are identified by different views of nature.
2. The “feeling of togetherness” has been formed by human life having been accepted in nature.  
The “feeling of separateness” has been formed by human life having been rejected in nature.
3. The life of the Japanese has been accepted historically in Japanese of nature, but the life of the Western Europeans has been rejected historically in Western European nature.

#### 要旨

本論文の目的は、日本人の「民族的精神構造」としての「一体感」の心理と西欧人の「それ」として「断絶感」の心理のそれぞれが日本の自然、西欧の自然のそれぞれの歴史的な在り方によって生成されてきたことを明らかにすることである。考察の結果、以下の事が確認された。

1. 「民族的精神構造」は「自然観」として同定されうること。
2. 「自然観」としての「一体感」(「断絶感」)は人間の「生」が「自然」によって「受容」(「拒否」)されることによって生成されること。
3. 日本の自然は、日本民族の「生」を歴史的に「受容」してきたのに対して、西欧の自然は、西欧民族の「生」を「拒否」してきたこと。

#### 1. 本論文の目的

本論文の目的は、日本人の「民族的精神構造」としての「一体感」の心理と西欧人のそれとしての「断絶感」の心理の根源的規定因であるそれぞれの「自然(環境)」(塹江ら<sup>1)2)</sup>について、それらが各民族の「生」に対して歴史的に如何なる在り方をして来たかを検討することである。

より具体的に云えば、日本の自然は、歴史的に日本民族の「生」に対して「受容的」であったのに対して、西欧の自然は、歴史的に西欧民族の「生」に対して「拒否的・拒絶的」であったことを明らかにすることである。

#### 2. 「日本民族」と「西欧民族」

本論文では、「日本民族」に対応させて「西欧民族」としているが、日本民族に対応するのは、決して「ド

\*愛知工科大学 \*\*聖徳学園岐阜教育大学

「イット民族」や「イタリア民族」ではなく、「西欧民族」と考えられるからである。日本人は、「単一民族」とあるとよく云われるが、もしこのことを認めるならば、西欧人こそ「ゲルマン民族」から成る「単一民族」とあると云えるからである。歴史的には、ゲルマン民族の一部族であるフランク族が構築したフランク王国が現在の独逸、伊の起源である。英はケルト人（始源地は、ルーマニア、あるいは、カスピ海付近）が先住民であり、その後ゲルマン民族のアングル人、サクソン人が、渡英して、ケルト人をアイルランドに駆逐し、さらに、その後ゲルマン民族のバイキングが渡英している。バイキングが建国したキエフ公国がロシアの起源である。デンマークを含む北欧はバイキングの国である。従って、西欧民族とはゲルマン民族のことである。この意味で、西欧民族として一括できるのである。

ドイツ人は、平時では、「われわれドイツ人」という表現ではなく、「われわれ西欧人」、あるいは、「われわれキリスト教徒」という表現をすると云う。(木村<sup>3)</sup>) 一方我々日本人は、「われわれ日本人」という表現を用いる。それ故、「日本人」に対応するのは「西欧人」なのである。

### 3. 民族的精神構造

#### 3.1 日本人の民族的精神構造としての「一体感」の心理

「民族的精神構造」とは、木村<sup>3)</sup>の言葉であるが、「民族固有・特有のものの見方、感じ方、考え方」のことである。塹江<sup>2)</sup>は、それを Jung (河合<sup>4)</sup>) の「民族的無意識(民族に固有な、そして共通して見られる心理特性であるが、それに対して「無自覚」である。)」として同定している。そして、塹江<sup>2)</sup>は、日本人の民族的精神構造として「一体感」の心理を指摘している。

「一体」とは、俗に云えば、我々日本人が日常生活の中で好んでよく使用する「心は1つ」という言葉によって示される意味である。すなわち、ある個人の「心理状態・心的内容」と他者の「それ」が一致、あるいは、同じである状態を指す。(両者の心理が一致、同じであるから2つの心理の間には「断絶」、「切れ目」がなく、連続である。すなわち、「一体」となる。)

そして、「一体感」とは、「一体」を意識的にせよ無意識的にせよ体験している心的状態、心理状態を指す。

また、「一体感信仰」の心理とは、個人が他者との人間関係において、「一体」、そして、「一体感」が存在する、存在しうることを意識的にせよ、無意識的にせよ、その存在に対する客観的証拠なしに先験的に信じている、あるいは、信じたい心理である。

さらに、「一体感志向」の心理とは、「一体感信仰」の心理に基づいて個人が「一体」、「一体感」を確認、あるいは、獲得すべく働きかける心理である。

#### 3.2 西欧人の民族的精神構造としての「断絶感」の心理

塹江<sup>2)</sup>は、西欧人の民族的精神構造として「断絶感」の心理を指摘している。そして、「断絶感」の心理とは、「一体感」のそれと内容において全く正反対の心理であることを指摘している。

### 4. 精神構造の規定因とその生成の機制

#### 4.1 精神構造の規定因としての「自然」

##### ① 人類の後発性

宇宙の生成(150-200億年前)、地球の生成(46億年前)、そして、その後に「海」・「生物」・「酸素」・「陸上植物」・「森林」・「動物」の順に生成されて、最後にこの地球上に「人類」(「ホミノイド」2,000万年前)、そして、現代人の祖先である「新人」(ホモ・サピエンス・サピエンス、クロマニヨン人)が発生したのが10万年前である。

宇宙の歴史的経過の所産としてこの地球上に人類が発生したのであるから、宇宙、地球、自然の在り方が人類(の在り方)を規定したのであって、決してこの逆ではない。したがって、人類は、地球上のそれぞれの「場」にしがみついたあたかも寄生虫のような存在なのである。それゆえ、人類の「生」の歴史は、「寄生」の歴史なのである。

##### ② 「よそ者」・「寄留者」としての人類

アブラハムは「私は「よそ者」であり、「寄留者」である。」と云ったとのことであるが、この言葉は、彼とヘブライ民族だけに妥当するものではなく、全人類(現代人をも含めて)に妥当するものである。そして、「人間存在」の本質を指摘したものである。人類は、正しく、地球・自然に対して「部外者・寄生者」なのである。それゆえ、少なくとも19世紀(「神は死んだ!」)までの「全智全能」ならぬ「無智無能」なる人類は、その「存在・生(の在り方)」において全面的に、そして、根源的に地球・自然の在り方によって規定されて歴史的に存続してきたのである。

地球・自然の「慈悲心」のみが、人類の存続を許したのであり、その慈悲心を要請するための手段が「宗教」なのである。宗教における「神」(「一神教」)の創造こそが、人類が「寄生的存在」であったことの何よりの証左である。

### ③ 精神構造・心理特性の規定因としての「自然」

自然環境に寄生しての人類の生(の在り方)は、必然的に、寄生したその自然(環境の在り方)が、人類の「精神(の在り方)」「精神構造・心理特性」を規定することをも意味する。つまり、人類の精神構造(心理特性)は、始源的には彼が寄生したその自然環境(の在り方)の所産なのである。

### ④ 「太古的人間」の「精神構造」

「よそ者であり、寄留(生)者」としての人類は、その寄生した自然によって、始源的、根源的、そして、一方的にその「生」を歴史的に規制されてきた。その結果として生成された精神構造(心理特性)の1つの例をJung(湯浅<sup>5)</sup>の「太古的人間の精神構造」に見ることができる。それは「自然への畏怖の念(心理)」と「人間の矮小さに対する自己卑下の心理」であり、それらを反映した「世界観」によって特色づけられるものである。彼は、アフリカの原住民の精神構造(心理特性)を観察し、「未開人の心理分析」として記述しているが、彼等の精神構造(心理特性)は正に「太古的人間の精神構造」のそれであるという。

## 4.2 精神構造生成のメカニズム

### ① 「条件づけ」による「行動傾向」としての「精神構造・心理特性」

自然に規定される人間の精神構造(心理特性)が生成されるメカニズムは、新行動主義心理学における「S-O-R」の図式の下での「条件づけ」によって形成される「行動習慣」・「行動傾向」としての「精神構造」として同定できる。

この図式で、S(Stimulus 刺激)、あるいは、E(Environment 環境)が、「自然(環境)」でO(Organism 生活体、すなわち、人間及び動物)が「人間」で、R(Response 反応)、あるいは、B(Behavior 行動)が自然に触発され、規定されての「行動」となる。この場合は、自然環境における諸々の刺激(となる諸々の事象)によって人間の精神(心理)に生成され、「刻印」される「反応」としての「感覚・意識」がRである。

そして、S→O→Rの過程が歴史的に反復体験されることによって「条件づけ」のメカニズムによって形成される $sH_n$ (「行動習慣」・「行動傾向」としての「精神構造・心理特性」という捉え方となる。

### ② 風土論的立場

木村<sup>2)</sup>は、「民族的精神構造」の生成のメカニズムに関して、風土論的立場より以下の図式で捉えている。

「自然」→「風土」→「生活様式(「生」の様式)」→「民族的精神構造」→「社会・文化の様式」

すなわち、自然(環境)が「風土」を介して人間の「生活様式(「生」の様式)」を規定する。その生活様式の結果として「民族的精神構造」が生成される。その所産が民族固有の「社会・文化の様式」であるとのことである。

## 5. 「民族的精神構造」としての「自然観」と「自然観」生成の機制

### 5.1 「自然観」の根源性

前述したように、人間の精神構造(心理特性)が、始源的には、彼が寄生した自然環境(の在り方)の所産であり、「よそ者・寄留者」である人間が、その寄生した自然によって「始源的」、「根源的」、そして、「一方的」にその「生」を歴史的に規定されてきたのならば、彼の精神構造(心理特性)の「本質的」、「根底的」、そして、「中核的」な部分は、彼の「生」を歴史的に規定した「自然環境(の在り方)」に対する彼の「心象(イメージ)」である。すなわち、彼の意識・無意識をも併せた心の全体で捉えられた「自然観」である。彼の生をその根源において支配・規定した対象に対するイメージが「自然観」であるから、それは、彼の「世界」に対する態度を規定するものとなる。それゆえ、「自然観」は、人間の精神構造(心理特性)の最も「本質的」、「基底的」、そして、「中核的」なものである。個体発生の観点で考えると、個人は、出生以来彼の「生」を「生殺与奪権」をもって「支配」した「両親」に対する「イメージ」が彼の精神構造(心理特性)の「中核」となる。(例えば、Erikson<sup>6)</sup>の「基本的対人信頼感」)そして、それが彼のその後の人生における「世界」に対する態度を規定するものとなるというアナロジーが存在する。

### 5.2 「民族的精神構造」としての「自然観」

木村<sup>3)</sup>が云うように、「民族的精神構造」が、その民族が置かれた自然によって生まれたものなら、その最も「本質的」、「基底的」、そして、「中核的」なものは、前述のことから「自然観」である。したがって、「民族的精神構造」は、その民族の「自然観」において同定されることが妥当であると考えられる。

### 5.3 「自然観」生成の機制

人間が自然との「出会いの場」である「風土」(木村<sup>3)</sup>)において「自然」が「自然」として「対象化」されることが、「自然観」成立の必要条件である。「対象化」の契機は「挫折」である。風土において人間の「生」が何等かの形で「阻止」(「阻害」、「拒否」、「拒絶」)されるとき、あるいは、「挫折」せしめられるとき、人間は、

自己の「生」を「挫折」させた「自然」を「他者」として認識する。そして、自然との間に「断絶」が認識され、「断絶感」が感覚され、自然の「対象化」が成立する。そして、対象化に伴ってそのより詳細なる「観察」が行なわれ、それに対して「命名 (naming)」がなされる。

自然（環境）の中で人間（民族、人類）が生を挫折を体験するとき、自然との間に（に対して）人間は「断絶感」を意識・認識・自覚する。挫折体験をもたないとき、原初的に存在した自然に対する「一体感」が破壊されずに維持され、存続する。

人間と自然との出会いの場、すなわち、風土において、人間が自己を自己として認識するのは「自然（の在り方）」の認識の後に、「それ」との関わりの中で、云わば「それ」によって一方的に「規定」される形で、相手（自然環境の在り方）から逆に照射（「逆照射」）される形で、自己に付与された「もの」（自己の取り分、自己の分け前）を「自己のもの（自己）」として認識するのである。

風土における人間の自己認識の過程、機制と個々の人間が出生後、特に母親との関係において母親の行なう育児の過程の中で「自我意識」を形成する過程、機制とは全く同じなのである。

## 6. 本論文の課題

塹江ら<sup>1)</sup>は、日本人の「民族的精神構造」が「一体感」の心理であり、西欧人の「それ」が、「断絶感」の心理であることを明らかにした。

また、塹江ら<sup>2)</sup>は、「民族的精神構造」の根源的規定因が「自然（環境）」であることを明らかにした。本論文においても、このことは前述した。

さらに、本論文において、「民族的精神構造」の中核となるのが「自然観」であることと「自然観」が生成される機制（メカニズム）とが前述された。

以上のことから、日本人の「自然観」が「一体感」であり、西欧人の「それ」は「断絶感」であることになる。つまり、歴史的に、日本の「自然（環境の在り方）」は、日本民族の「生」に対して「受容的」であったのに対して、西欧の「自然」は、西欧民族の「生」に対して「拒絶的・拒否的」であったことになる。このことを以下に検討する。

## 7. 日本の自然と西欧の自然

### 7.1 日本の自然と日本民族の「生」

日本人の精神の在り方との関わりで日本の自然について考察している著作に木村<sup>3)</sup>、会田<sup>4)</sup>、鯖田<sup>5)</sup>、筑波<sup>6)</sup>のものがあるが、本論文の主旨に最もかかわりがあるのが、

筑波<sup>6)</sup>の「米食・肉食の文明」であるので、彼の論旨を以下に簡単に要約する。

#### ① 「緑」と「青」の「自然」

日本列島の自然条件は、「温帯」と「湿潤」によって特色づけられる。このことは、人間の「生」にとって最適な「気温」と良質な「水」を保証するので、最適な生活環境を生成せしめることを意味する。気温と水は「食糧」となる植物の繁茂に最適な条件を生成せしめるので、豊かな「食糧」を提供する。（それに加えて、「海の幸」がある。「生き貝」とも云われている。太平洋の二大メリットは、日本民族に「水（食糧としての「海の幸」の意味）」と「安全」を歴史的に保証してきた。これに対して、「地中海」は「死の海」であると和辻<sup>10)</sup>は云う。）

日本列島の自然条件は、「温帯」、「湿潤」で「山紫水明」を生成せしめ、日光の強さ、降雨量は地球上で最も植物の豊かな地域の1つを生成せしめる。その結果、日本民族は、いわば、1万2000年前（縄文時代草創期）（最近の知見では1万6500年）から「水」と「安全」を無償で入手していたと云えるのである。（人間の「生」にとって最悪な生活環境は「飢」と「寒さ」である。この条件を根源的に規定するのは自然条件である。）

日本人は、自然の色を「緑」と「青」を中心にして色彩豊かに表現するが、「緑」は「植物」の多さを、「青」は「空」の快晴ときれいな「水」を表現しているのである。日光と水、したがって「植物」（＝食糧）、そして、その結果としてのきれいな「空気」に恵まれた自然の「豊かさ」の中で歴史的に「生」を営んできた日本民族は、自然に恵まれて育った民族と云いきってよいと筑波<sup>6)</sup>は云う。

#### ② 西欧の自然

緯度から見るとローマは北海道渡島半島、パリは樺太南部、ロンドンとベルリンは樺太中部に相当する。このことから見ても、西欧は地球上厳しい北の果てに位置した「辺境不毛」の地であることが分かりますと筑波<sup>6)</sup>は云う。（メキシコ湾暖流のせいで樺太よりは西欧の各都市は暖かい。）

#### ③ 日本人の「自然観」

部分的、そして、一時的には自然による災害（地震や風水害など）があったにしても、規模や頻度において特に西欧との比較の上では、その被害は問題にならず、西欧民族に比して日本民族は自然からもっぱら恩恵のみを受けてきたと云える。

その結果、「自然を人間と対立する存在とは見なさず、人間にとっての先天的な味方、人間が存在し、甘えることができる存在とみなすという「自然観」、すなわち、「自然」との「一体感」を歴史的に形成してきた」と筑波<sup>6)</sup>は云う。

このことは、日本人の「衣」、「住」における「自然」への「偏好」においても見られると云う。「住」においては、「自然」との「一体」、「調和」を維持すべく作られ、「衣」においては、様々な形で、自然の象徴である植物が図案化されて取り入れられている。

#### ④ 「自然」という言葉

木村<sup>1)</sup>は、「山」、「川」など個々の具体的な自然物指す言葉は存在するが、「自然全体」を総称する「自然」という言葉は古代の日本語には存在せず、「自然」という言葉は支那語から借用したと云う。このことは、前述のことから、古代の日本民族は「自然」を対象化していなかったことになる。「対象化」の「契機」が「挫折」であるから、古代の日本の自然は、日本民族の「生」を「受容」し、「阻害」しなかったことになる。

#### ⑤ 結論

以上のことから、日本の自然は、古来から日本民族の「生」を「受容」し、「阻害」しなかったので、「自然観」として、筑波<sup>2)</sup>も指摘しているように、日本民族は自然に対する「一体感」を歴史的に「保持」してきた、あるいは、形成してきたと云える。

## 7.2 西欧の自然と西欧民族の「生」

木村<sup>3)</sup>の「近代の神話」における西欧民族の歴史は、本論文の主旨に最適と思われるので以下に簡単に要約する。

### ① 「氷河期」の「寒冷化」による「食糧不足」

西欧は、「間氷期」においても、日本列島に比して「低温・乾燥」である。このことは、西欧民族は、歴史的に「飢」と「寒さ」によって「生」を「阻害」され続けてきたことを意味する。

その上、紀元前1400年から現在までの間に5回の「氷河期」が存在した。BC1400年からBC1300年、BC900年からBC300年、AD400年からAD750年、AD1150年からAD1350年、AD1550年からAD1850年の5回の期間である。紀元後の2000年間の850年が氷河期であったことになる。「低温・乾燥」傾向は、氷河期には激化する。したがって、西欧民族は有史以来歴史的に西欧の自然によってその「生」を根源的に、「阻害」され続けてきたと云える。

西欧民族の「生」の歴史は、この「氷河期」と「間氷期」によって根底的に規定されて来たのである。この氷河期と間氷期によって時代区分された各時期における西欧民族の「生」の状況を以下に簡単に概観する。

### ② 第2間氷期 (BC300年—AD400年)

この時期の状況を簡条書にすると以下ようになる。

1. ローマ帝国の繁栄、地中海世界の成立
2. 農業の発達

3. イタリア本土での穀物栽培の発達

4. 西欧地域は未開状態であり、歴史に登場しない。

### ③ 第3氷河期 (AD400年—AD750年)

1. ゲルマン民族の大移動と滅亡

寒冷化による食糧不足でゲルマン民族の4世紀から6世紀にかけてのライン河以東からの西欧への移動、そして、部族国家を構築したが、その大部分は、6世紀から8世紀の間に消滅した。

2. フランク族の存続

西欧に残存したゲルマン民族の一部族であるフランク族は、5世紀末クロービスがフランク族を統一してフランク王国を成立させた。フランク王国が後に今日の独、仏、伊になった。この意味でフランク王国の成立によって西欧世界の基礎の構築が開始されたと云える。

3. 西欧世界の基礎の確立

フランク王国は、メロヴィング朝からカロリング朝となり、8世紀の前半カール・マルテルが出現し、カールの息子ピピンを経てカール大帝 (ピピンの息子) が、778年にサラセン帝国と戦争し、西欧世界の基礎が確立されたと云える。800年のクリスマスにカール大帝が西ローマ皇帝になった時点で西欧世界の基盤の構築が完了したと云える。

### ④ 第3間氷期 (AD750年—AD1150年)

1. 8世紀中期における「地中海統一世界」の終焉

2. 西欧社会の本格的成立

2.1 農業社会の本格的成立

12世紀を中心とした前後200年間で、農業後進地域の西欧において農業生産様式が西欧社会の食糧生産様式の基盤となった。食糧生産様式として、その「量」、「安定性」の面から「農業生産様式」は、「狩猟・採取」、「牧畜」などより優れているので、農業生産様式が社会の食糧生産様式の基盤となることは、その社会の存立基盤が構築されたことを意味する。したがって、この時期に至ってようやく西欧社会が成立したと云えるのである。

日本列島においては、現在から2700年前に「畑作稲作」が開始され、2500年前から「水田稲作」が開始され、稲作農耕社会が成立し、1700年前に邪馬台国が成立し、古墳時代へと発展した経過に比して西欧社会の後発性、後進性がうかがわれる。

2.2 「三圃式農法」発明による「第1次農業革命」の生起

2.3 穀物収穫量の増大

2.4 豆類 (エンドウ豆、空豆) 栽培開始

### ⑤ 第4氷河期 (AD1150年—AD1350年)

この時期から15世紀までの間の西欧社会の状況経過を因果系列で図式化すれば、「気候不順」→「農業不況」→「食糧生産量の低下」→「人口過剰」→「栄養不良」

→「ペストの流行」→「死亡率の増大」→「人口減少」となる。「食糧不足」、「ペスト」、「戦乱」の「三重苦」によって西欧民族の「生」が「阻害」された時期であった。

1. 天候悪化による深刻な農業不況時代
  - 19世紀の中期まで持続する西欧の苦難の時代の開始
  - 1.1 独 農業荒廃による廃村の続出
  - 1.2 蘭 洪水による浸食
  - 1.3 ノルウェー 穀物栽培の放棄
  - 1.4 アイルランド 穀物生産の消滅
  - 1.5 アイスランド ノルマン人の植民地の荒廃、全員死亡
  - 1.6 英 穀物生産の停滞による牧畜への転換
2. ペストなどでの死亡増大による人口減少  
人口の推移は以下の通りであった。

1300年・7,300万→1350年・5,100万→1400年・4,500万→1450年・6,000万→1500年・6,900万→1550年・7,800万  
1300年の人口水準に回復するのに250年を要したことがある。日本人の歴史における人口推移とは比較にならないことがよく分かる。

ペストに関しては、1347年・1348年のペストが一番有名で死者は4238万6486人（どこまで信憑性があるかは疑わしいが）であったという。

#### ⑥ 第4氷期（AD1350年—AD1550年）

1. 農業の活発化
2. ルネサンス

#### ⑦ 第5氷河期（AD1550年—AD1850年）

「近代化」時代の挫折の時代、西欧の「どん底」時代

##### 1. 第5氷河期

16世紀後半から開始された第5氷河期は、「フェルナウ氷期」と呼ばれ、有史時代最大の氷河期とされ、気候不順に始まり、近代史上最低最悪（ということは西欧史上最低最悪）の17世紀（有史時代で「最寒」）を中心とし、19世紀中期に至る300年間の時代である。

##### 2. 「近代化」と「近代」

西欧の歴史学者は、18世紀、19世紀を「近代」とし、16世紀後半から17世紀一杯を「西欧「近代化」時代」と呼んでいると木村<sup>13)</sup>は云う。「西欧近代化時代」は、西欧民族にとって、そして、この時代以降の西欧民族を含んでの全人類の「生」にとって「普遍的」なるものを創造したという意味で記念すべき時代なのである。

##### 3. 西欧近代化時代の西欧民族の「生」の状況としての「四（重）苦」

第5氷河期の「寒冷化」は、「寒さ」と「飢」（寒冷化による食糧作物の不足）と「経済的低成長」を生ぜしめた。「飢」による「慢性的栄養失調」は「疫病（ペスト）」を大流行させた。「飢」、「寒さ」、「病気」は西欧世界住

人の人心を荒廃せしめ、社会全体に充満した欲求不満を介して「魔女狩り」を生ぜしめた。更に、「生活苦」、「欲求不満」は、「農民一揆」、「宗教戦争」を含む「戦乱」を誘発した。

したがって、西欧近代化時代は、「飢」、「ペスト」、「魔女狩り」、「戦争」の「四（重）苦」の時代であった。西欧民族の「生」の歴史において、最も「生」が「阻害」されたのがこの時代なのである。それゆえ、「西欧近代化時代の挫折の時代」、西欧の「どん底」時代と呼ばれるのである。

#### ⑧ 結論

以上のことから、西欧の自然は、古来から西欧民族の「生」を「阻害」し、特に「氷河期」においてはこの傾向が強化されたことが分かる。それゆえ、西欧民族は、自然に対する「断絶感」を歴史的に形成して来たと言える。

## 8. 西欧の「牧畜業」と日本の「農業」

自然が人間の「生」を「受容・拒否」するに際して根源的なことは「食」を付与するか否かである。自然（条件）が、人間の「食糧生産様式」とその「質・量」を規定することによって人間に「食」を付与する。そして、「食生活の在り方」を規定するのである。

ここでは、日本、西欧の自然（条件）が、各民族に如何なる「食糧生産様式」を付与し、その結果として、「食糧」の「質・量」を如何に規定したかを検討する。（資料としては、鯖田<sup>8)</sup>、筑波<sup>9)</sup>を参照する。）

### 8.1 西欧の食糧生産様式としての「牧畜業」

#### ① 牧畜の「不経済性」

ある一定の面積の土地から生産される食糧（穀物）を直接人間が食して得られるカロリーを100とするとき、その食糧で家畜を飼育して、その家畜を人間が食して得られるカロリー数は、「牛乳」で19.4、「鶏」・9.7、「豚」・18.5、「牛」・6.8、「羊」・7.6のことである。このことは「家畜」を「食糧」とするとき、人間が確保できるカロリー数は、「穀物」に比して絶対的に不足することを意味するのである。したがって、「食糧生産様式」としての「牧畜業」は「不経済」なのである。

#### ② 牧畜業の立地条件

西欧の気温と湿度の条件から規定される植物の繁茂条件を考えると、「穀物」生産には不適なのである。和辻<sup>10)</sup>は、「西欧には雑草がない」として、西欧の風土を「牧場的風土」と規定したが、「雑草」が繁茂しない（というよりは「出来ない」）ことは、食糧となる「穀物」が栽培できないことを意味するのである。

植物が、雑草と称せられる程に遅く成長すると固く家畜の菌に合わず、家畜の飼料にならない。植物を繁殖せしめない西欧の自然条件は、植物を家畜の菌に手頃な「牧草」程度の弱々しいものしか成長せしめないのである。それゆえ、西欧では、わざわざ「牧草」としての植物を栽培しなくても、いわゆる「野草」が「雑草」にならずに「牧草」になるので、家畜を飼育することは容易で手間がかからないのである。

### ③ 食糧事情

食糧生産様式として不経済極まる牧畜行に依存せざるを得なかった西欧民族は、西欧の歴史を通じて常に「食糧不足」、すなわち、「飢」に悩まされ続けてきたことは容易に推察出来る。この事情は、現代にも通用する。

### ④ 食糧自給率

1960年において、西欧諸国で食糧自給が可能なのは「仏」のみで、英、独、伊は昔と同様不可能なのである。肉類に限定すれば、自給率は、米で100%、英・58%、独・86%、仏・102%、伊・82%、日・93%である。

## 8.2 日本の食糧生産様式としての「農業」

### ① 「水田稲作(水稲)」の「経済性」

無肥料連作した場合、初年度の収穫量を100とすれば、次年度は「水稲」で74.7%、「陸稲」・38.6%、「麦」・36%であるという。このことから、「水稲」が「食糧生産様式」としては「経済性」が大であることが分かる。

しかし、西欧の一部の地域(伊、仏の一部)を除いては、自然条件(気温と降水量、そして、両者の組合せ)は、西欧に水稲栽培を許さない。したがって、西欧の農業の穀物栽培は、麦類を中心とした畑作となる。

### ② 穀物生産力の低さ

西欧の土地は「貧しく」したがって、「土地生産性」は極度に低い。ある資料によれば、9世紀の初期で、播種量に対する収穫量は、スペクトル小麦で1.8倍、大麦・1.6倍、小麦・1.7倍、ライ麦・1.0倍であったという。農業経営の見地からは「労働力」分だけ「赤字」ということになる。正に「悲惨」としか表現のしようがない。如何に西欧の土壌が「土地生産性」が低いかが分かる。その上「連作」不可能なのである。さらに、「間氷期」でこの状態なのである。それゆえ、西欧での穀物生産は極めて困難なのである。

### ③ 西欧の穀物生産力の歴史的推移

「大開墾時代」そして、第1次農業革命(「三圃式農法」の成立)を経過した後の13・14世紀で播種量に対する収穫量が3倍位で、19世紀の第2次農業革命(休耕地にクローバ、カブ類を植える)後に5-6倍で、現在は7-24倍(日本の場合は、52-144倍)である。

それゆえ、西欧においては、歴史を通じて、「パン」

は「贅沢品」であり、とても「主食」にすることは不可能であった。だから「肉食」にせざるを得なかったのである。したがって、「肉食」は「経済的豊かさ」の証明にはならないのである。

### ④ 日本の「水稲」の場合

日本の「水稲」の場合「1粒万倍」という言葉があるが、それ程ではないが、西欧の「麦類」とは比較にならない位「土地生産性」が大なのである。土地生産性を基準に水田を「上田」、「中田」、「下田」に区分するが、「中田」で、播種量に対して収穫量が30-50倍(江戸時代)である。

「五公五民」、「六公四民」という言葉は、農民の「貧窮さ」を意味するのではなく、「絶対的生産量」の大きさを意味するのである。実際、水田の「石高」の算定基準に問題があり、現実の「生産量」と「徴収量」との関係で表現すれば、せいぜい「三公七民」なのである。(佐藤・大石<sup>12)</sup>(津軽藩は、幕府に正式に認められた「公認高」である「表高」は4.5万石であったが、「実収」は30万石であったので、1808年以後は幕府に運動して10万石として公認してもらったという。(板倉<sup>13)</sup>)

「農民一揆」についてその規模・頻度・激しさを同時代的に日本と西欧を比較すればすぐ分かることであるが、比較にならない位西欧の方が激しいのである。西欧の農民の方が問題なく「困窮」していたのである。

### ⑤ 穀物自給率

1960年の時点での西欧諸国の穀物自給率は、「麦類」では、英で40%、伊・76%、独・90%、仏・112%である。「米」に関しては、伊で125%、仏・56%である。

## 8.3 結論

以上のことから、西欧民族が、歴史を通じて「食糧不足」に悩まされていたことが分かる。正に「生」をその根源において「阻害」されていたのである。

## 9. 結論

以上のことから以下の結論を導出できる。

### 9.1 日本民族の場合

日本の自然は、「温帯・湿潤」によって特色づけられるが、この条件は、日本民族に「快的な暖かさ」とこの条件によって生成される「豊かな」水と「豊かな」植物(当然「食用植物」を含む)を歴史的に付与してきた。

また、この条件は、「食糧生産様式」として極めて「経済的」な「水田稲作農業」を可能にした。それゆえ、日本の自然は、歴史的に日本民族の「生」を「受容」してきた。したがって、日本民族は、自然に対する原初的

な「一体感」を喪失せしめるような「挫折体験」をもたなかった。それゆえ、日本民族の「自然観」は「自然」に対する「一体感」である。

「自然観」は、「民族的精神構造」の本質的・根源的・中核の部分となるので、日本人の「民族的精神構造」は「一体感」の心理であると結論出来る。

## 9.2 西欧民族の場合

西欧の自然は、「寒冷・乾燥」とその条件が極度化された「氷河期」によって特色づけられる。この条件は、西欧民族に「寒さ」とこの条件によって生成される「飢」とを歴史的に付与してきた。「飢」と「寒さ」は、人間の心に最も「みじめな」心理を生ぜしめる生活環境なのである。

また、この条件は、「食糧生産様式」として極めて「不経済的」な「牧畜業」を西欧民族に強要した。それゆえ、西洋の自然は、歴史的に西欧民族の「生」を「拒絶・拒否」してきた。したがって、西欧民族は、自然に対する「断絶感」を「自然観」を形成してきた。

それゆえ、西欧人の「民族的精神構造」は「断絶感」の心理であると結論出来る。

## 文 献

- [1] 塹江清志ら：「「一体感」と「断絶感」 名古屋工業大学紀要, pp.185-190, Vol.50. (1998)
- [2] 塹江清志ら：「精神構造の規定因としての「自然」 名古屋大学紀要, pp.187-192, Vol.51. (1999)
- [3] 木村 敏：「人と人之間」 弘文堂 (1972)
- [4] 河合隼雄：「ユング心理学入門」 培風館 (1967)
- [5] 湯浅泰雄：「神々の誕生」 以文社 (1972)
- [6] Erikson, E.H. 著, 小此木啓吾訳：「自我同一性」 誠信書房 (1973)
- [7] 会田雄次：「合理主義」 講談社 (1966)
- [8] 鯖田豊之：「肉食の思想」 中央公論社 (1966)
- [9] 筑波常治：「米食・肉食の文明」 NHK (1969)
- [10] 和辻哲郎：「風土」 岩波書店 (1963)
- [11] 木村尚三郎：「近代の神話」 中央公論社 (1975)
- [12] 佐藤常雄・大石慎三郎：「貧農史観を見直す」 講談社 (1995)
- [13] 板倉聖宣：「いたずら博士の科学教室－歴史の見方考え方」 仮説社 (1987)